

国立音楽大学附属中学校入学試験問題

平成二十九年二月一日実施

国語

解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の——線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 新たに開園した遊園地に、家族で行った。
- ② ロッカーに荷物を預けて、園内をぶらぶら歩いた。
- ③ 順番を待つ間にお茶を飲み干し、やっと人気の乗物に乗れた。
- ④ 最初、目の前に立体的な風景が映し出された。
- ⑤ 昔の武士の合戦を思わせる映像の後、乗物が急降下した。

- ⑥ やがてシオが満ちてきて、海の中へ入った。
- ⑦ ゾウキが透けて見える生き物も泳いでいた。
- ⑧ 人類のソセンが生きていた大昔の海の景色も見えた。
- ⑨ このアトラクションは外国にもユシユツされている。
- ⑩ 楽しかったので、次に来る日をテチヨウに書き込んだ。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本に書いてあること、本に載っていることがすべてではない。

国語辞典を例に考えてみよう。国語辞典にあらゆる言葉が載っているだろうか。そんなことはない。国語辞典にもいろいろ種類があって、大きさで分けると大中小とある。中学生や高校生が使うのは、小辞典や中辞典、学習辞典などだろう。大中小の国語辞典はそれぞれなにが違うか。いちばんの違いは収録されている言葉の数だ。語彙数という。大辞典にはたくさん載っている。小辞典には少ししか載っていない。

じゃあ、大辞典にはすべての言葉が載っているか。残念ながらそうではない。大辞典をつくる国語学者や編集者は、すべての言葉を載せたいと思っている。しかし新しい言葉がuggぎと生まれる。そのなかには、テレビで芸人が使って流行した言葉や、若者が仲間内で使いはじめて広まった言葉などもある。新しい言葉、流行語のなかには、3年もすれば使われなくなり、忘れられてしまうものもある。たぶんそうやって消えていく新語や流行語のほうが多いだろう。でも、定着していく言葉もある。言葉は常に新しく生まれる。

新しい言葉を辞書に載せるか載せないか。辞書づくりにかわる人がいちばん悩む問題だ。すぐ消えていくような言葉は載せたくない。でも、どの言葉が残り、どの言葉が消えるかは、言葉ができたときはまだわからない。¹辞書はいくら改訂して新しい版になっても、そこからこぼれ出てしまうものがある。辞書は常に生の言葉を後追いでいくしかない。

新しい言葉だけじゃない。ごく一部の地方だけで使われている言葉が発見されることもある。その地方の人びとにしてみれば前からずっとあったのだから新しいものではない。発見なんていういい方は失礼かもしれない。でも辞書をつくる人は気づかなかった。辞書に載っていない言葉はたくさんある。

できるだけたくさんさんの日本語を載せようという大辞典ですら載らない言葉がある。²中辞典は大辞典よりも収録語彙数が少ない(大辞典と中辞典の違いは語彙数だけじゃないけど)。小辞典となれば、もっと少ない。

でも実際に生活していると、小辞典ぐらいでじゅうぶん間に合う。^a本や新聞や雑誌を読んでいてわからない言葉が出てきたり、書けない漢字があったら引く。小辞典で間に合っていれば、なんとなく小辞典にはすべての言葉が載っているような気持ちになる。だけど実際には小辞典に載っていないくて中辞典に載っている言葉があるし、中辞典より大辞典のほうがたくさんさんの言葉が載っている。そして、大辞典にも載っていない言葉がある。³

それは図鑑でも同じだ。植物図鑑にすべての植物が載っているわけではない。昆虫図鑑にすべての昆虫が載っているわけではない。植物学者や昆虫学者、図鑑の編集者たちが「すべてを載せたぞ」と思っても、新しく発見される植物や昆虫はある。そして、未発見の植物や昆虫も世界にはたくさんいるだろう。現実の世界は本の世界よりも大きい。

²ときどき考え方が逆立ちしてしまう。本に載っていないことはウソだと錯覚してしまうのだ。植物図鑑に載っていない植物は植物じゃない。昆虫図鑑に載っていない昆虫は昆虫じゃない。国語辞典に載っていない言葉は言葉じゃない。まさか！本よりも世界は大きくて広い。

本を読んでもわからないことはたくさんある。

旅行するとき、ガイドブックを読む。「あそこに行こう」「ここで食べよう」といろいろ計画する。地図を見て、どの道を歩くか考
える。ガイドブックを見ているだけで、旅をしているような気持ちになる。わくわくしてくる。

実際の旅はガイドブックどおりとはいかない。楽しみにしていた美術館は臨時休館かもしれない。お寺は改修中で大きな幕がかっ
ているかもしれない。食べたかった名物料理は、ガイドブックの写真よりうんと小さく、味も期待したほどではなかったかもしれない。
だいいち、天気が違う。ガイドブックの写真はいつも晴れている。でも実際の旅が天気めづに恵まれるとは限らない。台風が来るかもしれ
ないし、ひどく寒い日が続くかもしれない。

でも、ガイドブックどおりでない旅がつまらないわけではない。美術館が臨時休館していても、その近くにおもしろいお店があるか
もしれない。名物料理にがっかりしても、ガイドブックに載っていないおいしいものがあるかもしれない。

⁴以前、四国を旅していて、^{*2}台風そうふうに遭遇したことがある。高速道路は閉鎖へいさされ、町を歩くこともできない。ぼくはホテルの隣となりにあつ
た文学館に入った。文学館に興味があつたわけではない。ほかに行くところがなかったのだ。文学館では展示物を丹念たんねんに見た。館内の
何か所にもある資料ビデオはすべて見た。1回まわっただけでなく、3回もぐるぐる見て歩いた。³「だんだんおもしろくなつて
きた。興味のなかった作家が好きになり、その町で生まれた作家のことをあれこれ想像した。それ以来、ぼくは文学館を見つけると入
るようになった。あのとき台風が来てガイドブックどおりの旅ができなくなることがなかったら、一生あの文学館には入らなかっただ
ろうし、ほかの文学館に興味を持つようになることもなかった。旅はガイドブックの外にある。

(永江朗著『本を読むということ』より)

*1 改訂：書物などの内容を改めること。

*2 遭遇：思いがけず出会うこと。

問一 1 3 にはどの言葉が入りますか。最もふさわしいものを次のア～オの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(同じ記号は二度使えません。)

ア たとえば イ ところが ウ あるいは エ だから オ すると

問二 線 a 「間に合う」、b 「錯覚してしまう」、c 「丹念に見た」とありますが、その意味として最もふさわしいものを次の

ア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「間に合う」

ア 安心できる イ 頼りになる ウ 役に立つ エ 信用できる

b 「錯覚してしまう」

ア 納得なつとくしてしまう イ 言い張はってしまう ウ 説得せとくされてしまう エ 思い違いをしてしまう

c 「丹念に見た」

ア じっくり見た イ むきになって見た ウ なんとなく見た エ しかたなく見た

問三 国語辞典は大きさで分けると、大辞典、中辞典、小辞典となりますが、その一番大きな違いはどのようなことですか。その答え
にあたる部分を十一字で抜き出さない。

問四 線 1 「言葉は常に新しく生まれる」とありますが、新しい言葉はどのようにして生まれますか。

問五 線 2 「大辞典ですら載らない言葉がある」とありますが、なぜ辞書に載っていない言葉があるのですか。その理由を二つ
答えなさい。

問六 線 3 「それ」はどのようなことを指していますか。

問七 線 4 「以前、四国を旅していて、台風に遭遇したことがある」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 台風のために出歩けなかったことで、筆者はどのような体験をしましたか。
- (2) その体験から、その後筆者はどのようなことをするようになりましたか。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

遼介が三年生のとき、初めてサッカーの試合を観にスタジアムに連れて行ってくれた帰り道、父は自分がキャプテンになったいきさつを話してくれた。¹遼介はその話が好きだった。

「今日はどうだった？」

綾子は居間のテーブルでなにかの書類を整理しながら、いつものせりふをかけてきた。

「負けたよ、二試合とも」

「そうか、残念だったね」

振り返らずに言った言葉は、さばさばとしていた。

「それから……」と遼介は少し躊躇^{*1}するような口調で言った。「キャプテンを決めた」

綾子はようやく振り返って、不思議そうな表情を見せた。「キャプテンは遼介じゃなかったっけ？」

「六年生のキャプテンは星川、ぼくは副キャプテンに決まった」

²面倒くさそうな早口になった。

「そうなんだ……」

綾子の声に沈んだ響きがにじんだ。今年も自分の息子がキャプテンだと思いこんでいた。息子がキャプテンにこだわりの持っていたような気がしたので、それ以上声をかけることをためらった。

遼介は黙って居間のくたびれたソファに体を投げ出した。

いつもなら三人きょうだいを育てるたたくましい母親は「汚れたユニフォームを早く脱いで、さつさと風呂に入って！」と怒鳴るところだったが、この日は黙っていてくれた。³

3LDKのマンションには、まだ遼介の部屋はない。ひとりになりたくたつてなれやしない。でも、ときには、ひとりになりたいときもある。綾子のおせっかいな視線や、妹や弟がまとわりついてくるのがうっとうしくなることもある。我慢できない衝動に駆られて、叫びたくなることだってある。最近、とくにそういう気持ちになりやすい。

居間の壁に張られたバルセロナのロナウジーニョのポスターを見上げた。父が出張に出かける前に買ってきたサッカー雑誌の付録だった。綾子は居間の壁に張ることに断固反対したが、耕介は笑いながら聞き入れなかった。ロナウジーニョはゴールを決めたあとなのだろう、両手を空に向けて広げ、ゴールに酔いしれるように走りながら微笑んでいる。両手の人差し指だけが伸ばされ、左腕にはキャプテンマークが巻かれていた。

もう自分はあるのキャプテンマークを左腕に巻くことはないのだな、とぼんやり思った。四年、五年とキャプテンをやってきたけど、なにが足りなかったんだろう……。

そういえば、と思いつきソファから立ち上がった。玄関まで急ぐと、自分のサッカーバッグを開けた。シューズ袋を取り出し、タオルをどけると、カバンの底、白いスネ当ての下から黄色のキャプテンマークが顔を出した。

——このキャプテンマークは、どうすればいいのだろうか？

そんなことが、なぜだかすぐく気になった。母親に相談しようかと思ったが、やめておいた。今度の練習のときに少し早めに行って、そつと部室の六年生の用具箱に返しておこう。そう決めた。

人ごみを縫いながら、青い壁の長いコンコースを通り抜けると、芝生のピッチが不意に目の前に広がり、自分はスタジアムの観客席に立っていた。ゴール裏から歓声が湧いてくる。いくつもの大きな碧の旗が揺れている。遼介が観る初めてのサッカーの試合に、父は日本代表戦を選んでくれた。⁴

「父さんは、高校生になってからサッカーを始めたんだよ」

あの日、スタジアムの帰り道で父は話し始めた。

「小学校六年生のときに冬の高校サッカー選手権を観て、中学校でサッカーをするつもりでいた。でも、父さんの中学校は変わっていて、入学するとすぐに部活動の希望届を出すように言われたんだ。希望は、一番から三番まで書かなくてはならなかった。でも、担任の女の先生から『サッカー部は不良の集まりだから、やめておきなさい』と言われた。それで、気の弱かった父さんは、第一希望に野球部、第二希望にバレー部、第三希望にサッカー部なんていう中途半端な希望届を出したんだ。学校からの回答はバレー部だった。それで、一年間バレー部に所属し、辞めた。もともとスポーツは好きだったから、退屈な毎日を送ることになった。それから三年生になり、高校受験が終わって入学先が決まると、ひとり猛然と体を鍛え始めた。それは、高校でサッカーをやるためだったんだ」

父からそんなふうに昔の話を聞くのは、遼介にとって初めてのことだった。

「それで、高校に入ってサッカーを始めたの？」

父はうなずき、続きを話してくれた。「どんなサッカー部だろうと、入部しようと決めていた。チームは弱かったけれど、自分へたくそだったから、最初のうちは補欠だった。だから、サッカー部の練習が終わったあと、ひとりで暗くなるまでボールを蹴っていた。遅れを取り戻すために、一生懸命サッカーに打ち込んだ。それで、試合にも出られるようになっていったんだ。それから、高校二年生の夏に、三年生たちの最後の大会を迎えた。その試合にも、父さんは二年生だったけれど、先発で出場した。先輩たちの最後の大会だから、なんとしても勝ち進んでいきたかった。一試合でも多く一緒にプレーしたかった。でも、雨の中でやった初戦に0対1で負けて、一回戦であっけなく終わってしまった。何人かの先輩は、更衣室に戻って来ても泣いていた。これで先輩たちと一緒にサッカーをすることはないのだと、膝を抱えて座り込んでいると、足元にだれかが、なにかを投げてよこした。見ると、泥だらけの黒いスパイクだった」

遼介は父親の顔を横からのぞいた。

「顔を上げると、キャプテンが向かいに座って、こっちを見ていた。キャプテンは『おまえにやるよ』と言ってくれたんだ」

父の横顔は、夕食にビールを飲んで機嫌がよいときのように幸せそうだった。

「それはね、まだ新しかったけれど、サイズが合うかもわからない泥で汚れたスパイクだったんだよ。そのとき、キャプテンはこう言った。『おまえがキャプテンになって、このチームを引っ張っていつてくれ』。チームには、父さんよりサッカーがうまい選手がいた。

でも、先輩たちは、父さんをキャプテンに指名してくれたんだ」

耕介は遠くを見る目で話した。

「どんな気持ちだった？」

「うれしかったさ。たぶん、初めて人に認められた瞬間だった」

「どうして選ばれたのかな？」

スタジアムからの帰りの電車で揺られながら遼介は父に訊いた。終着駅に近づき、乗っていた大勢の客はすでに途中で降りていて車内はすいていた。

「たぶん、その頃、父さんがチームでだれよりもサッカーに夢中になっているように、見えただと思うよ」

そう耕介は答えた。

「キャプテンからもらったそのスパイクは、どうしたの？」

耕介は少し考えたあとで「一度履いてみたけど、大きすぎたから靴箱にしまったままだった。そのあとは記憶にないな。たぶん、おばあちゃんが捨てちゃったんだと思うよ」と言っただけで懐かしそうに笑った。

「ふうん」

6 電車のシートに揺られながら、投げかけられた泥だらけのスパイクを遼介は思い浮かべた。

それはとても大きなスパイクだった。

その話は遼介の心に残った。

それから、キャプテンへの強い憧れを抱くようになった。

四年生になって初めてキャプテンになった日、遼介は急いで家に帰ると、父に一番に報告した。

「父さん、おれもキャプテンになったよ」

うれしそうに父は笑ってくれた。

父さんと同じキャプテンになれたことが、とてもうれしかった……。

(はらだみずき著『サッカーボーイズ 再会のグラウンド』より)

*1 躊躇する：ためらうこと。

*2 碧：深い青色。

*3 訊く：尋ねる。質問する。

問一 線 a 「さばさばと」、b 「不意に」とありますが、その意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「さばさばと」

ア 同情する様子

イ 冷ややかな様子

ウ がっかりした様子

エ さっぱりとした様子

b 「不意に」

ア とつぜん

イ はっきりと

ウ まぶしいくらいに

エ 思っていたとおり

問二 ――線1「遼介はその話が好きだった」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 父から「その話」を聞いた日のことは、本文のどこから始まりますか。初めの四字を抜き出さない。
- (2) 「その話が好きだった」とありますが、遼介は「その話」を聞いて、どのような気持ちを持つようになりましたか。

問三 ――線2「面倒くさそうな早口になった」とありますが、なぜ遼介はこのような態度になったのですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 日頃からおせっかいで口うるさい母親がいろいろと話しかけてくるので、それに答えることが面倒になったから。
イ 二試合とも負けて心身ともとても疲れていたので、早く休みたくて、母親と口をきくのがわずらわしかったから。
ウ 細かいことは話したくないが、せめてキャプテン決めの結果だけは、家族に言わなければいけないと思っているから。
エ 家族の期待を裏切ったのが悲しく、泣きたい気持ちをこらえるのが精一杯で、早く一人になりたいと思っているから。

問四 ――線3「この日は黙^{もく}っていてくれた」とありますが、なぜ綾子は黙^{もく}っていてくれたのですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 遼介がソファに体を投げ出すのを見てあきれてしまい、もう何も言う気がなくなったから。
イ 二試合とも負けて帰ってきて、遼介がとても落ち込んでいるのを見ると、かわいそうになったから。
ウ だらしない遼介の様子に腹が立ったが、今怒鳴って言い合いになっても不快になるだけだと思ったから。
エ 遼介はキャプテンになれなくて気持ちが沈んでいるだろうと思いやり、そつとしておこうと思ったから。

問五 ――線4「父さんは、高校生になってからサッカーを始めたんだよ」とありますが、なぜ中学でサッカー部に入らなかったのですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 父の入学した中学は、入学後すぐに希望届を出す決まりになっていたので、クラブ活動の様子を十分に見学する時間もないまま届を出し、バレー部に入部することになったから。
イ 本当は中学からサッカー部に入りたかったが、希望届を書く時、担任の先生の話などからサッカー部を第一希望とすることに迷いが生じて、バレー部に入部することになったから。
ウ 友達希望届を出すとやっていないサッカー部より、友達が入ると言っていた野球部やバレー部の方が活動しやすいと思つて届を出し、バレー部に入部することになったから。
エ 勉強とクラブの両立ができるかととても心配だったので、先生や先輩の話から、練習が楽だというクラブの順番に書いた希望届を出し、バレー部に入部することになったから。

問六 ――線5「先輩たちは、父さんをキャプテンに指名してくれたんだ」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 耕介は、なぜ自分がキャプテンに指名されたと思いましたか。
- (2) 耕介は、先輩たちがキャプテンに指名してくれたことを、どのように受け止めましたか。

問七 ――線6「それはとても大きなスパイクだった」について、遼介の思い浮かべたスパイクがとても大きかったのは、なぜだとあなたは思いますか。